

儒教的仏教の自覚

加地 伸行

ただ今、田中先生から過分のお言葉を頂き、困っているところです。タイトルは、「儒教的仏教の自覚」という大変難しいものになっております。これは私がつけたのではございませんが、少しお話させていただきます。

今日は駒澤大学の方が圧倒的に多いという事ですので、そのつもりでお話申し上げたいと思います。先ほど、ご紹介いただいたように、私は若いころ高野山大学の教員でありました。実は私は、真言宗の信者でありまして、受戒もしている人間です、仏教に対しては、敬意を持っております。

高野山大学には六年間おりましたので、仏教の基本的なところの勉強もいたしました。当時は、山の下から通っていましたので、毎週、高野山の山上の宿坊に泊まらせていただいていたわけです。すると、夜には学生がやってきて、いろいろな話しかけてくるんですね、それに対して私もあれこれ答えるといった形で、楽しい時を過ごしました。

いつでしたか、あるとき、学生が「今から奥の院へ行きましょう」と言い出したわけです。高野山では、山内のはるか遠くに弘法大使空海の遺体を納めてあるところがあります。奥の院の一番果てのところですよ。宿坊が一杯あると

ころと区切る橋から奥の院までの道筋は、ずうつとお墓なんです。

平安朝以来の方々のお墓であつて、藤原道長も自ら山に上がつて納経していますので、どこかに道長のお経も埋められているでしょう。

特に江戸時代にたくさんのお墓が作られており、全国の大名が寄進してお墓を作っています。そうした凄いことです。その道の果てにある奥の院にお参りしようと学生が言いだし、私も若かつたものですから、行こうという事になりました。五六人で歩きだしまして、区切りの橋を渡つてからはずうとお墓が続き、月の光が差す非常に気持ちのいい夜でした。その道の途中で、自然発生的に『般若心経』が出てきました。『般若心経』は眞言宗ではごく普通に読むお経ですが、その五六人は、私も含めて、ごく自然に『般若心経』を繰り返して唱えながら奥の院までの道を、月の光の中を歩いて向かつたのです。その時、大変感じるところがありました。普段では得られない特殊な感じを受けたことは事実です。

なぜなんだろうと考えますと、やはり、奥の院へと向かう道すがらの累々たる墓石群です。その墓石群の中を歩いていく中での感覚、そして『般若心経』を唱えながら歩く時の感覚に加えて、死者、亡くなつた方との出会いというものが、何か私の心に大きく響いてくるように感じたんですよ。もちろん、お墓参りの時には、亡くなつた親しい方と出会うということがあるわけですが、そういうことではなく、全く存じ上げない方々、私と縁の無い方々の墓石群の中をずうつと行くとときに、感じたものというのは非常に大きかつた。

そこで、私はお墓というものは一体なんなのかということ、その時に考えたわけです。それまでは、お墓に対してごくありきたりな気持ちしかなかつたんですが、お墓と生きている人間との関係とはなんだろうか、というようなことを考え始めたのが、その時です。そこから私の研究人生が始まつたわけなんです。その結果、先ほど田中先生

がご紹介くださった『儒教とは何か』『沈黙の宗教』などの本で扱った問題にはいつていつたということですよ。

高野山大学では、それこそ「門前の小僧」ですから、空いている時間がありますと、他の先生の講義を拝聴しました。授業料を払わずに、適当にさぼりながら、つまみ食いでもやさしそうな講義を選んで聴きました。

そこで関心を持ちましたのは、駒澤大学の先生方にはしばらく耳をふさいでお願いしていたんですが、日本仏教はどこから来たのかという問題です。中国から来たわけですね。では、中国仏教はどこから来たのか。これは当然、インドから来ました。そうすると、向こうから渡ってきたのだから、向こうに元があると思つたのですね。

そうなると、中国よりもインドの方が上である、というようになりがちです。日本仏教よりも中国仏教の方が上であつて、中国仏教よりもインド仏教が上であると、変な順番を意識するわけです。それが学問形態に変わると、インド仏教が最高の中心であり、ひとランク下がったところに中国仏教があつて、その下に日本仏教があるということになる。こういう序列を大学で教えているんですよ。駒澤大学ではどうかは知りませんが、インド仏教を研究するのが最高であるというのですから、できる学生はインド仏教を学ぶのだ、サンスクリット語からパーリ語まで勉強するのが高野山大学の主流である、というわけです。そして、出来の悪いのが中国仏教を取り、もう一つ出来の悪いのが日本仏教を学ぶというムードだったんですよ。

私はおかしいと思ひましたよ。なぜ日本仏教より中国仏教が上で、さらにその中国仏教の上にインド仏教が鎮座しますんですか。ところが、我が国の宗門大学においては、そういう発想が今もって消えていない。私は、高野山大学の若い教員として、それはおかしいと思ひました。もっともそれを言うとな怒られますので、黙っておかしいなと思つておつたわけです。

これに対して、一般大学での宗教学はどうかというところ、もっとひどいんですわ。そのひどい話を申し上げます。私

は、ひどい話をするのが好きなんですよ。悪口を言うのが一番楽しいですね。

まず、宗教学というのとはどうなっているのかということからお話しましょう。一般の大学の文学部で、宗教学と
言われるものがあるところの実体ですね。

明治十年、西南戦争が起こった年に、東京大学ができました。文学部が中心です。現在、大学入試では文学部は
軽視されていますが、憤慨に堪えないですね。六十五年前、私が学生だったころは、学問をするなら、文科系は文学部、
理科系なら理学部ということになっていました。外の学部は専門学校みたいなものです。医学部は医学専門学校、
工学部は工学専門学校、法学部は法学専門学校なんです。ですから、文学部の者はそうした学部を下に見てました。
ああいうのは、大学で学ぶものじゃないと思ってました。本当ですよ。私が京大に合格した昭和三十一年における文
学部の入試合格最低点は、医学部の最低点より五点开高かったですよ。文学部・理学部が大学の主流ですよ。

それはともかく、東京大学に宗教学が開講されたとき、どんな宗教学が講じられたか。当時の東京大学の教員た
ちは、ほとんどすべて欧米へ留学した者たちです。近代的な大学ですからね。たとえば、中国学については、世に
は伝統的な漢学もあつたんですが、そうした学問をしている者たちは一切排除された。当時の人のことですから、漢
文もきちんと出来たとはいえ、欧米に留学した人が中国学の担当者になった。そういう時代です。

昔ながらの漢学を勉強してきた人たちは、放り出されましたから、仕方なしに自分たちで塾を作っていた。そ
れがルーツとなつて、大東文化大学とか二松学舎大学とかができたのですよ。

ですから、当然のことながら宗教学についても、欧米の宗教学を直輸入したんです。これは、時代が時代ですか
ら、仕方ないですね。当時は欧米の学問を直輸入して講義をするというのが大学の姿だったんですから。それゆえ、
宗教学では、欧米で学んできたことをそのままストレートに講義してたんですよ。では欧米の宗教学とはどうい

ものかという、宗教にランキングをつけるんですよ。大きくは四段階のランキングに分けるんです。

まず、一番低い段階は自然宗教だということなんです。山や川、太陽、雲、雪、空、星、そういうものを崇める素朴な宗教これが宗教の始まりだということなんです。神道はここに入るんですよ。すると、神道は第四ランクね、ということになる。

次の上の段階は、靈魂を祀ることで、シャーマニズムとか祖靈信仰などです。これが第三ランク。日本人はこれを聞いてがっくりするわけです。日本の宗教の多くはここに入りますから。こっくりさんなどをしていたわけですが、これらは下の下ということになる。

第二ランクは何かというと、多神教です。神々がたくさんいらっしゃる。第一ランクは、一神教です。一神教こそ最高の宗教であるとした。

こういう四ランクがあるということ、堂々と教えていたんです。欧米の宗教学というのは、そういうもんじゃないですか。一神教の中で今日でも残っているのは、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教で、その中でもキリスト教が最高であるとするわけです。そして、その下にユダヤ教とかイスラム教があるというランキング作りをしているんです。そして、お前たち日本人は一神教は知らないだろう。多神教は多少知っているが、実際には靈魂をまつつたり、自然をあがめたりすることだけなんだから駄目なんだ、とこう来るんです。

それを聞いた当時の学生は、真面目だから、そうなんだと思ひ込んだんですね。そこで日本の宗教を見てたら、初日の出を拜んだりするのは、自然宗教だということですよ。そして、靈魂をあがめたり、祖靈を祀るなどというのは、多神教のまだ下だからだめだということなんです。

一方、一神教の神というのは、全知全能だということですよ。何もかもすべて出来なざる神を考え出したわけです。唯一最高で、われわれの想像を絶する神ですよ。ヤーヴェというのか、エホヴァというのは知りませんが、そうした

最高の全知全能の神がいらつしやる。それを信じるものが、本当の宗教に入ったものであるというんです。

多神教はと言うと、いろいろな神様がいらっしゃる。そうした神々は、一知一能なんですね。それぞれ専門がある。商売繁盛の神なら、えびすさんにお参りに行くわけです。学問の神様といったら、菅原道真公を祀る天神様です。癌封じは、お薬師さんですか。そうしたところにお参りに行くわけです。そのようにそれぞれの専門がある。間違つたら駄目ですよ。違った神様のところに行つても、効力を持つてらつしやらない。正月には、健康第二でいこうということなら、癌封じの神様にお参りするし、今年の子供が大学受験だというなら、天神様に行こうということになるわけです。

つまり、我々は神様を選んでるわけです。これを称して「捨てる神あれば拾う神あり」という。人間の方が神様を拾つたり捨てたりしているんです。これは多神教です。お参りするのは現世利益ですので、お参りしたら、その証に必ずお守りを頂いてくるわけです。だから、我々の家にはお守り札がいらっしゃる。私の家なんか、お守りが箱にいっぱいある。日本人は多神教なんです。バイクに乗つて大きな音を出して走り回っている暴走族がいますね。ああいう連中も多神教なんです。腰にお守りをぶらさげてる。どんなお守りかと言つたら、交通安全です。

だから、多神教というのが、我々のだいたい神感覚、仏感覚なんです。それを無理やり一神教にしろといつても、無理な話です。しかし、明治の最初の頃に、一神教こそが最高だと教えたため、日本人の真面目な人はその通りだと思ひ込んだ。そこで、東京大学で学んだ人が全国で教員となり、十年たち、二十年たち、三十年たち、百年となつていくと、こういう宗教学が我が国の宗教学の基本定義となるんです。私もそのように学びました。

そこで日本人はみなコンプレックスを感じ、一神教はすごいと思つわけです。そんなことないって。上も下もあるかない。自分が信じているものが最高の宗教なんです。そのことを間違えないようにしましょう。

明治の初めはそのようであったから、多神教である日本人は宗教、実は一神教に対してコンプレックスを感じていた。仏教徒の中にも、コンプレックスを持った人がいっぱいおったわけです。そうした中、近代化をはかるとする真宗、一向宗の方々は、一神教がいいと思ひこんだ。そこで、我々は阿弥陀さんだけを拝んでいる、阿弥陀さん一尊だけだから、一神教に近いと勘違いしたんです。

ですから、真宗は、明治に入ってから急に阿弥陀仏、阿弥陀仏とばかり言うようになった。しかし、例えば真言宗でも阿弥陀さんを拝みます。日本仏教のどの宗派でも阿弥陀さんを拝みますよ。ところが、真宗の人は阿弥陀さんだけ突出させ、自分たちは一神教に近いというプロパガンダをしたんです。明治の頃の清沢満之が書いていることを読んでみてください。そういう風に一神教風に作り替えていったんですよ。

ひどいことに、姿形まで真似始めた。真宗の人は、キリスト教の真似をして僧衣をやめ僧服という洋服を着ているでしょう。真宗はキリスト教のカトリックを真似たんです。そうして物真似ですけど、一神教らしいことをしてきてたんです。

しかし、宣伝上、真宗を伸ばすためにしてきたけれど、実態は違っています。一向宗を創めた親鸞は、「私が亡くなったあと、遺体は賀茂川に投げ棄てよ」とおっしゃっている。賀茂川に投げ棄てるということは、遺体を魚に食わせるということです。お墓など作らなくてよい。それが親鸞の遺言でした。親鸞はインド仏教的なところへ回歸していったんです。そして、お墓はいらない、葬式もいらない、年忌法要もいらないと言ひ残して亡くなられた。

ところが、京都の大谷祖廟をご覧ください。入り口から奥の果てまで、ずうっと墓石群になっています。あれは全部親鸞の教えに反する。直ちに潰すべきです。真宗の門徒ならお墓は作らないはず。蓮如の五百回忌などというのは、親鸞の言っていることと全く違うことを行っているわけです。年忌法要をするわ、お墓は作るわ、お盆や

お彼岸にはお坊さんが来てお経を読むわ、というのはおかしいじゃないですか。こういつた点を見なければいけない。

先ほどご紹介くださった『儒教とは何か』という本を発表しまして、二カ月後くらいだったでしょう。真宗の金沢別院の責任者の方から講演の依頼がありました。どういうことですかと尋ねたら、電話でこう言われました。

「我々は明治以来、〈家の宗教から個の自覚の宗教へ〉という運動をしてきました。ところが、みなうまくいかず、門徒は全部家の宗教へと帰ってゆく。だから、若い僧侶などはみな悩んでいる。いくら説教しても門徒たちは、結局家の宗教へ帰っていく。お墓を持つ、葬式をする、そうした宗教に帰ってしまう。理由は分からなかったが、先生の本を読んで、なるほどと思ったので、話してください」というわけです。そこで、講演をしに行つたんです。

すると、翌月には、創価学会から講演の依頼が来た。真言宗の信者である私に、真言宗からは全然声がかからず、縁のない真宗や創価学会から講演依頼が来るというのは、それだけ彼らは深刻だったからです。なぜかといううちょうどその年、創価学会は大石寺と大喧嘩して分かれたあとだったんです。そうすると、大石寺と縁を切つてしまつたから、困つたことが起こつた。それは、死者が出ることです。つまり、お坊さんが来てくれないので、死者をどう吊つたらいいか分からず、右往左往し、困つたわけです。そこへ、私の『儒教とは何か』が出版され、葬式は仏教とは関係ない、儒教だとあつたため、それに飛びついて、話をしろということになつたんです。

そこで、全国の青年部の幹部が集まつた大阪の創価学会へ講演をしに行つてきました。今、大臣や国会議員などになつている公明党の人たちも、その時、聞いていたんじゃないでしょうか。私の講義後の彼らの葬儀形態は、彼ら自身がネーミングした「友人葬」という形です。創価学会は葬送部というのを各支部ごとにつつて、僧侶とは無関係に「友人の葬儀」と称してずつとつけてきている。大石寺と分かれてからの危機は、救われたわけです。友人葬がなければ創価学会はつぶれてます。それを救つてあげたのは私ですよ。もつとも、それから後、全然挨拶がない

ですけど。

このように、現実の民衆が求めているものと、仏教学者が言っていることとは、大分ズレがある。民衆が求めているのは、仏教という宗教です。仏教学などといった学問は求めていない。ところが、我が国の宗門大学は、依然として仏教学を説いているのであって、仏教を説いているとは思えない。

そのように宗教のランキングがあるなどと馬鹿馬鹿しいことを言ったために、我が国が惑わされてきたのはこの百数十年です。もう抜け出しましょうよ。秋月龍珉という人は、臨済宗の人でしたか、訳の分からないことを書いています。「今の仏教は本当の仏教ではない」と書いているんですよ。本当の仏教とは何かというと、要するに葬儀もない、お墓もない、そういうものが本当の仏教だといっている。

しかし、それは大間違いです。それは、インド人が行なっているもので、我々日本人は、インドから中国を経て、日本へと入ってきた仏教を基にして日本仏教を作り上げたんですよ。それを嘘の宗教だという人が、僧侶自身の中にもいるじゃないですか。それが大きな間違いだと思います。

圭室諦成という人が『葬式仏教』という本を出して、「葬式仏教」という言葉を広めたんですが、日本仏教を「葬式仏教」と呼んで馬鹿にしているのは、一般の人ではなく、僧侶自身ですよ。これはとんでもない問題です。なぜなら、もし日本仏教から葬式を抜き、お墓を抜き、年忌法要を抜いたら、何が残るでしょうか。観光寺院を除きお寺は全部倒れてしまう。

お寺を支えている民衆が求めているのは、葬式であり、年忌法要です。そして、もう一つ大事なことは、お寺が人々と結びついているという事です。もちろん、江戸時代の寺請制度は、政治政策によってできたんですよ。政治が強制的に行なったものではあるけれど、根があった。基盤があったから成功したんです。はつきり言って、寺請制度は

キリスト教の真似事です。キリスト教は教会制度を作った。カトリック信者は生まれた時から全部カトリック教会に属すわけです。日本はそれをキリスト教から学んだ。

ただ、ルーツはなんであれ、日本は昔から基督がきちんとあつたからこそ、寺請制度は定着していった。それまで、お寺を中心として人々が集まつていたことは間違いないんです。それでいいじゃないですか、このように伝統として残ってきたことを馬鹿にしてはいけないということを、ぜひ申し上げたい。そして葬式仏教を馬鹿にするようなやり方は、我が国の仏教を貶めていると思うんです。

なぜそのようなことができるのかというと、我が国の仏教の歴史を考えれば当たり前の事なんです。仏教は確かにインドで起こった。これは間違いないことですね。文化というものは、力が強いときには、膨張主義で前へ前へ行きますからね。力のない文化ではそのような余裕がないですから。

さて膨張していった結果、南アジアのインドからまず西へ行つたが、駄目だった。西アジアから西は一神教だったからです。ユダヤ教、イスラム教、キリスト教があつて仏教は問題にならない。逆に、イスラム教徒が十一世紀にインドへ攻め込んできた時、仏像の顔を全部潰しましたね。それは偶像崇拜を禁止しているからです。西はそういう理由で駄目でした。

では北はどうか。北はヒマラヤ山脈があつて、当時は徒歩であつたために物理的に困難でしたが、長い時間かけて中央アジアに出て行つた。中央アジアでは仏教が広がった。文化は力が強い側が勝ちます。中央アジアの文化は仏教に勝てなかつたから、仏教化されていきました。一方、南アジアから東南アジアへも広がった。この地域は無人の野を行くように広がっていきます。それは、仏教が持つ文化性、宗教性が、東南アジアの人々にとって魅力があつたからです。仏教が広がり定着していきます。

ですから、東南アジア系の仏教というのは、もともとは古典的なインド仏教的なものです。しかし、インドの仏教は滅びてしまう。今でも残ることは残っていますが、二千万人程度であって、しかもカースト制のさらに下の方の人達だけが仏教徒となっています。ですから、インドでは伝統的な仏教は滅んだといつて良いでしょう。

さて、仏教は中央アジアから東北アジアに入った。中国、朝鮮、日本ですね。その仏教はどのようなものであったかというと、中国人は誰も仏教など知らなかった。仏教と聞いても誰も賛成しなかったし、むしろ笑ったんです。何を笑ったかという、「輪廻転生」を笑ったわけです。死後の世界があつて、輪廻転生という形で移っていくのだと聞いて、そんなことがあるはずがないと皆笑った。それはそうでしょう。たとえば、子供の生まれの私が死んだとして、子供が年忌法要をしてくれたとき、仮にネズミに生まれ代わった私が出てくるのでしょうか。鉦がチーン、ネズミがチュウと言つて。そんな馬鹿な話はないでしょう。確かに、六道輪廻という考えは、人に人徳を求めるときにはいいですね。私は講演に呼ばれた場合、六道輪廻の話をする、皆真剣に聞きます。話がうまくできていて、ラッキングをまず示す。六道の上の仏は我々凡俗には関係ない。そうすると、天人から人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄という六段階すなわち六道のコースは、なかなかうまくできています。脅しにはちょうどいいです。

たとえば、グルメ旅行などで食べ放題がありますね。冬になったらカニ二食べ放題とかありますが、「そのようなことをしている人は、死後必ず餓鬼道に墮ちる。だから、一汁二菜に下さい」と言うと、皆真面目な顔をして頷いています。輪廻転生の話は、人々に仏教道徳を説くにはいいんです。まして、地獄めぐりの話などすると、皆ほつと感心するわけです。こうした話をして楽しませることから生まれてきたのが落語「地獄めぐり」じゃないですか。

さて、輪廻転生という考えが中国に入ってきたとき、中国人は皆笑った。なぜ笑ったかという、中国ではすでにちゃんと死後の世界の説明が出来上がっていたからなんです。儒教に基くそうした死生観があつたので、そこへ

輪廻転生の話が来ても、受けつけなかったし、笑ったわけです。しかし、西アジアのように仏教者を殺しはしなかった。西アジアでは仏教徒といえは異教徒ですから殺されます。皆さん、イスラム教の悪口を言つてはいけませんよ。殺されますから。筑波大学の先生は、イスラム教の悪口を書いた本を訳したら殺されたでしょ。しかし、東北アジアではそのようなことはない。

中国に仏教が一世紀に入つてきた。入つてきてから、信者はだんだん増えてくるが、どうしても困るのが死後の問題であつた。輪廻転生だけは、中国人は受け入れがたかつた。そういう中で、七、八世紀の隋唐時代になつた頃に中国仏教の新しい形が生まれてくるんです。儒教的死生観を巧みに取り入れたんです。取り入れるために、必要なお経まで作つた。『孟蘭盆経』なんて、中国製のお経ですよ。いつの時代でも御用学者はいますから。お経まで作つて、儒教的なものをうまく取り入れた中国仏教が誕生したんです。

その頃、中国大陸に渡つた秀才が二人いた。最澄と空海とですよ。彼らは、それを学んで日本へ持つて帰つてきます。ところが、それ以前に中国に渡つた人の場合、儒教的な死生観を取り入れる前の仏教でしたので、日本では仏教はそれほど広まらなかつた。貴族だけにしか広まらなかつたんです。

日本人も持つていた儒教的なものがあつたからこそ、儒教的な仏教に対して賛同者が増えていったのは当然ですね。そこから真の日本仏教の歴史が始まるんですよ。以後、様々な形で展開し今の仏教があることは、皆さんご存知の通りです。中国的な儒教の死生観をうまく取り込んで、それを見事に完成したのが日本です。

仏教は中国では違つた形になって生きますし、また中国には道教というものがあり、それとの戦いもありましたが、日本のような展開はなかつた。またもう一つ、中国人は教条主義的に考えるところがあつた。たとえば、僧侶は、仏教の教え（たとえば肉食しない）を守らなければいけないですが、現代の日本ではそこまでの縛りは無いでしょ。

ところが、中国人は、僧侶と同じような縛りを一般信者にもかけるんです。たとえば、中国人で仏教徒になったら、肉食できませんよ。私が大阪大学に着任した頃、中国からの留学生がたまたま仏教徒でした。肉類は食べられないので、コンパでは、野菜だけの鍋にしたんです。信者も肉食しないんです。そんなことを日本でやったら、みんな仏教をやめてしまうでしょう。

ですから、中国では仏教はなかなか広まらない。よほどの信念を持った人でないと無理である。大体中国人は肉食であつて、朝から肉の天ぷらみたいなのを食べてます。肉がなかったら、やっつけられない。そういう理由で、中国ではなかなか仏教が広がらない。

日本とのもう一つの違いは、中国には寺請制度がなかったことです。中国ではお坊さんに対する個人的魅力でお寺に行くんです。だから、僧侶が魅力的だったら信者が増えるんですが、そのお坊さんが亡くなったら、信者もいなくなる。お寺が廃寺になるといふのはそういう理由です。

では、韓国はどうかというと、ご承知のように、李氏朝鮮五百年の間、つまり室町時代から日韓合併のあつた時代まで、徹底的に仏教を弾圧したんです。儒教の朱子学を重んじ、仏教を弾圧した。お寺はすべて潰してしまつた。僧侶の中の純粹に宗教者であろうと思つた人たちは、山の奥深い所へ入つていき、ひっそりと山寺で暮らしました。町にはお寺はなかつた。山寺で世捨て人のように生活している僧侶は別として、町にいた僧侶はどうなったのかご存知ですか。身分を落とされて、差別的な賤民にさせられたんですよ。ですから、李氏朝鮮五百年の間、仏教は町では跡形もなく消えていくわけです。もちろん時々復活しましたが、太筋はそうですね。

だから朝鮮半島には、仏教的なもの残るはずないし、まして信仰は別のものになる。そしたら、結局、仏教は東北アジアでどこに残っているのかというと、我が日本だけです。

しかも、我々の大乘系の仏教と東南アジアのいわゆる小乗系の仏教とはまるで違います。こういう中で、我々の生活で根ざしているのが、我々の仏教ではないですか。日本仏教こそ今日における仏教の主流ですよ。本当の仏教とか、本当のキリスト教とか言う人がいますが、そんなものは無いって。本当のキリスト教というものはどこにあるんですか。キリストの話した言葉しか残ってないんですよ。後に解釈して、新しい解釈が加わっていつて今日のキリスト教が成り立っているんですよ。原始キリスト教に帰っても何もありませんよ。仏教もそうです。お釈迦さんの言葉なんて、少ししかないじゃないですか。いくらひねくり回しても、一週間でしまいです。それでは駄目です。その後の長い長い仏教の歴史は解釈じゃないですか。そういうものの積み重ねが沢山あるのが日本仏教です。そして、日本仏教が前に出てくるのは当たり前のことです。そうした点をぜひご理解いただきたい。

もう、インドもいらない、中国もいらない、日本仏教をとことん研究する必要があるので、僧侶自身が馬鹿にするとは何事ですか。その馬鹿にしている原因が、年忌法要であり、葬式であり、お墓であるというのが大間違い。それこそ日本仏教の核になっているわけですね。そういうところに人々はついてきているわけですよ。ついてきている大切なものをなぜ捨てるんですか。それは自ら宗教であることをやめるといふこと以外の何ものでもない。私はそのように思うんです。

結局、我々にとって仏教というのは、日本人の持っていた儒教的性格、またはるか大昔の自然宗教とか、祖霊信仰とか、多神教といったものが、全部ミックスされているわけですね。一神教的なものというのは我々は持っていないし、持つことはできません。失礼ながら、この中にクリスチャンがいらっしゃるか分かりませんが、それは特別な方々です。我が国一億三千人のうちクリスチャンはわずか百万人、あとはキリスト教と関係ない。キリスト教といったら、十二月二十四日の神として位置づけられています。それ以外は何の関係もない。我々は多神教なので関係ないし、

それでよろしい。

それを、日本人は宗教心がないなどというのは大間違いです。我々こそ宗教心が大いにあります。毎日神様仏様が違うんだから忙しくて仕方がない。それぐらい、忙しく我々は神を崇めているわけで、そして現世利益をきっちりもらうでしょ。現世利益は大事ですよ。現世利益がなかったら誰が拝みますか。

現世利益という発想があるから、いろんなあり方が違うんです。たとえば、寄付を例にとつてみると、キリスト教では日曜教会に行くと、終わりに帽子がまわつてくるじゃないですか。そしたら、金額はいくらでもいいですが、帽子にお金を入れる。こんなこと日本人はしますか。法要の場で帽子をまわすなんていう無作法なことはいけませんよ。その代わり我々は、献花料というようなものを納めて、そしてお守り札をいただくなどします。我々は寄付をした場合、必ず何か領収書に近いものを頂くのが我々の感覚なんです。キリスト教みたいに出しっぱなしというのはいない。だから寄付の形が向こうと我々とは全く違う。向こうの寄付は出しっぱなしで、日本は寄付したら板に名前を彫つてもらおうというようなことを要求する。あるいは、今回の寄付は誰々から頂きましたと、名前をざつとあげる。「金いくら」と額まで書いてあるところがある。それがないと我々は寄付をしないんです。名前も何もないのでは、寄付しても納得しないんです。

キリスト教のバザーなども同様です。バザーというのは、その日行つて皆さんが出したものを安く買うわけですよ。それに対して、日本人のバザーに参加する態度を見てみなさい。バザーは終わるところになると値引きがあるので、奥さんたちは時間をつぶしてそれを待っている。バーゲンセールと勘違いしている。バザーする方もする方で、品物が残っていると全部買ってもらうために夕方には値段を下げるわけです。バザーを主催している方も買うほうもバーゲンセールの発想です。

これは我々が多神教だからです。一神教の信者は、バザーへ行く時、今日はいくら寄付すると決めていく。今日は二千円寄付しようとか思つて出かけていき、五百円と値札のついている品物でも二千円置くんです。これがバザーの本当の買い方です。日本人はおつりを必ず貰う。しかし、おつりは貰つてはいけませんよ。必ずそれ以上のお金を置いてくるというのがバザーの本当のあり方です。だから、今度皆さんがバザーへ行くときはそういう気持ちで行きなさい。

話が飛躍しますが、これは我が国の社会保障と関係があるんです。ヨーロッパの経済を学んだ経済学部の教師などは、「年金が足りないから、増税しなければいけない」などと偉そうなことをいつておる。それはおかしいんです。彼らは、本当のヨーロッパを理解していない。本当にキリスト教社会的な意味での社会保障の発想で行くならば、お金を積み立てたとして、そのお金が誰か困った人を救うお金となるようにするんですよ。だから、年金なり、社会保障なりでお金を払っているけれども、己に返つてくることなど考えてはいけません。これはプールして、プールしたお金で困った人へ使う。自分は元氣だからいいですよ、というのが本当です。これが一神教的社会の社会保険や社会保障のあり方です。

ところがヨーロッパの経済学を学んだ経済学部の教授なども、実は多神教なんです。だから、出したお金は取り返すという発想でものを考えている。彼らの論文は多神教の発想で書かれているんです。出したら取り返す。何歳からもらわないと損になるなどという、どうしようもない計算をしている。これは間違いです。出したら戻つてこない学生たちに教えるべきなんです。そんなことを聞いた学生はイヤになつて、明日から来ないですけど。経済学部の教師はヨーロッパで生まれた社会保障という考え方をするのであるならば、ヨーロッパ的発想で、出したお金は返つてこないということを教えないといけない。ところが、多神教的な発想をするので、ヨーロッパの発想が身について

いない。だから、日本で足る足りないという話ばかりになっているわけです。

それは別として、我々は我々の本性というものを見ないといけない。そこを間違っているから、様々な問題が起きてくる。たとえば、もうひとつ付け加えると、今日我々のしているスポーツだって、民族性の現れなんですよ。我々は農耕民族、欧米の人々は狩猟民族です。狩猟民族とは何かというと、弓矢を持って獲物を取りに行く。走り回って弓矢で射てた者が取った獲物を処分できる権利を得るわけです。自分が一番おいしい肉を取って、ついで来た者には足の肉か何かやって、ついでこない者にはやらないというわけですよ。そこから生まれたのが能力主義じゃないですか。それが発展したの形が個人主義じゃないですか。個人主義は狩猟民族の能力主義の表れです。あんなもの近代的でも何でもない。西暦以前からのものですよ。

ところが、我々は彼らと違って農耕民族です。特に日本人は農耕的で、集団で一生懸命働いているわけです。だから、集団で田植えをする時、ちゃんと列を作つてする。そのときに、能力主義を発揮してしまうと、田植えは揃わなくなつてしまう。だから、みなで歌を歌いながらゆっくりゆっくり植えていく。この集団主義、言い換えれば家族主義が我々の性格です。そういうものがあつての今日の文化なんです。ここを間違えてはいけない。

だから、スポーツなどにおいても、狩猟民族である欧米人は走りまわるのが得意です。そうした土地で生まれた最高のスポーツがサッカーじゃないですか。サッカーはずっと走りまわっている。ボール（獲物）を追つてゴールに蹴りこみ決めるのは、狩猟民族が獲物をとつて喜んでる姿なんです。そんなサッカーにどうして日本人が血の道あげるのか。絶対に勝てませんよ。第一、我々は足が短くて胴が長い。逆に欧米人は走り回っているから、足が長くて胴が短いんですよ。彼らは肉を食べ、肉は体内で腐るので早く排出しなければいけないので胴が短い。だから重心も上にあがっている。しかし、我々は違う。野菜をたくさん食べ、野菜は消化に時間がかかるから胴が長くなる。

だから、自然に重心は低くなる。スポーツにおいて走るのは、重心が高いから走れる。重心が低いものが走ってみても、早く走ることできませんよ。だから、我々には重心の低いスポーツがいいんです。

たとえば、踊りを見てみなさい。欧米人のはバレエでしょ。つまさきで立って、くるくる回ってる。あれは重心が高いから出来るんです。我々にはできない。日本人は舞踏の時、腰を落として重心を下げ足を地につけて舞うんです。足を上げての踊りと違うのです。スポーツにしてもサッカーは日本人向きではありません。重心が低く、クワを振ってストレッチ運動を続け、農耕をおこなってきた我々に向いているのは剣道じゃないですか。剣道は我々日本人にとって最高のスポーツなんです。国際化したらいけません。

そうした一定の文化的背景があるんですから、そうしたものを無視しては駄目ですよ。我々は長い間、ちゃんとお墓を持ち、年忌法要をし、祖先を守ってきた。これが、我々のいい意味での家族主義と結びついて今日に至っているんです。その家族主義というものが、今一番忘れられているんですよ。

先日、最高裁において愚かな判断がありましたね。不倫してできた子供にまで正妻の子供と同じ相続の権利を与えるというんです。個人主義で平等だからなどといったが、何言ってるんですか。そんな馬鹿なことを言ったら、正妻の地位が危うくなってしまうですよ。これだといくら不倫しても構わないということになる。正妻が苦労して家の仕事をしているのだから、財産の中に妻の働き分もあるはずじゃないですか。それなのに、愛人の子供に渡してしまつてよいものでしょうか。普通に考えても、妻と作った財産は半分半分ですよ。妻も一生懸命働いて作った共同の財産を、なぜ愛人の子供にやらなくてはならないのか。

あれは、個人主義というヨーロッパの思想に頭の先から足の先までくるまれた愚かな最高裁の判事たちが出した愚かな判決なんです。中国人や韓国人は頭の先から足の先まで家族主義、ヨーロッパ人たちは頭の先から足の先ま

で個人主義、我々日本人は頭だけ、観念だけが個人主義で、首から下は家族主義なんです。だから、最高裁の判事たちは、頭の中で考えた事を言ってるんです。首から下のわれわれの感覚にしてみれば、おかしい判決なんです。我々は首から下の家族主義で生きていますから、これを大事にしないとイケない。

その家族主義が危ないのは、家族の団結というものをしないからです。団結を深めるために、教育学者は対話を多くしなさいと言ひ、心理学者は同じものを食べて鍋をつつきまうのがいいと言ひます。そんなのは嘘です。日本人は、親子の対話なんかしますか。親子は「今日は晴れですね」「そうですね」といったぐらひの対話しかしないですよ。日本の親子はまず話はないんです。鍋をつつくといいたって、毎日すきやきですか。

我々はそんな天氣の挨拶や食事で結はれているんじゃない。我々を結び付けているのは何か。お仏壇ですよ。もちろん、今の若い人たちの家にはないかもしれない。昔の農村には本家があつて周りに分家があつたから、仏壇は本家にしかないこともあつたが、これからはそうではない。所帯ごとにお仏壇を持つべきだと、私は主張し続けているんですよ。お仏壇は聖なる空間ですよ。その前に家族が集まるじゃないですか。

もちろん年忌法要、お盆、お彼岸などがあれば、関係あるお坊さんがいらっしやる。それも大きいことですね。そうやって、お仏壇の前でおつとめをする。私なんか毎日してますよ。そしたら、自然と子供は後ろに座りますよ。私が読み上げるつたないお経を、小さいころから一緒になつて読み上げる。これが家族の精神的紐帯になる。

さまざまなことが家族にはあります。子供が悪いことをするときもある。そのとき、まずは子供と一緒になつて仏壇に向かつて、一緒にお勤めをする。そして、やおら後ろを振り返つて言ひます。「私が怒っているんじゃない。ご先祖様が許さん」。そついうと、これが効くんですな。親父には権威がないから、私の言ふことは全然聞かないですけど、ご先祖様と言ひつた瞬間に、「はいっ！」と聞ひく。

娘が嫁入りするときには、前の晩は悲しいが喜びの日じゃないですか。一緒にお勤めをしました。そういうように春夏秋冬、様々な人生における家族の出来事、喜びも悲しみも一緒にできる場が、お仏壇の前じゃないですか。その仏壇を思想的にも教義的にも支えているのが、属している宗派の僧じゃないですか。だから家に来ていただいて、お仏壇の前でおつとめをしていただく。これを大事にしなくてどうするんですか。

最後に一つ申しませう。私の弟子が結婚した際、仲人をしたんですね。その祝いの品として、私は新婚さんにお仏壇をプレゼントしたんですよ。安いのをみつくるってね。向うはびつくり仰天です。旦那は私の教え子だからすぐ理解しましたけど、奥さんはびつくり。私はその時、条件をつけたんですよ。それは、自分の家の先祖代々の霊位という位牌だけでなく、必ず一緒に奥さんの家の先祖代々の霊位という位牌も立てて祀れ、ということですよ。その後、ひと月くらいしてからでしたか、新婦さんの実家のお母さんから長いお手紙を頂きました。それを読んで、私は涙をこぼしましたよ。

そのお母さんは、「悩みに悩んでおりました。自分の一人娘を結婚させた後、自分の家の祭祀をどうしたらよいか分からなかった。そしたら、加地先生が自分の家の位牌も一緒に立てるとおっしゃって下さったため、二人は今、両家のお位牌の前でお勤めをしていると聞き、私はこれで安心して死ねます」ということでした。苦勞なさったお母さんですね。母一人子一人で育ててきた。私は、そのお母さんの気持ちがよく分かりました。

その母親の気持ちを教えたのは、我が国にあつて長い間続いてきているお仏壇じゃないですか。これを大事にしないといかんですよ、そういう話をするよ、必ず質問する人かいる。お仏壇は高い。どうしたらいいか。値段ですよ、問題は。そしたら、お仏壇を手作りで作ればよろしい。ダンボールの箱でよろしい。それに千代紙など貼ればいいんです。特に幼い子供に貼らせなさい。立派なお仏壇は必要ない。そういったことを現場の僧侶は言うべきです。

家族で色紙を貼り合わせれば、それはそれで立派なお仏壇なんですよ。日本仏教の諸宗派は、そういった運動をなさないと、私は言っているわけです。

こうした話をしていると、徹夜しても話さきれませんので、ここで一応終わらせていただきます。どうも有り難うございました。